山里での出会い

八馬　順子

「おばさぁ～ん、何のお役にもたちませずご免なさぁ～い」少年の甲高い声が山々に響き、私の耳に届いたのは夏の昼下りであった。連合いはコロナ禍の人流を避け、緑が茂る滝の流れる所にカーナビをセットした。生野高校の近辺で〝目的地はこの周辺です〟カーナビは終了し、着いた所は朝来郡生野町の町中で想像していた景色ではなかった。案内板の前で地図帳を照らしていると、三人の野球少年が自転車で通り信号待ちをした。挨拶し「高校の近辺と出ている宮の瀧へ行きたいのですが何処でしょうか」「高校はこの先ですがその瀧は知らんなぁ…なぁ」日焼けしたレギュラータイプの二人の少年は、首を傾け手を左右に振った。残る一人は色白で目が大きく利発に見え「ここは朝来ではなく朝来なんだけど…」と遠慮がちに呟いたのが印象的であった。三人は挨拶し自転車で急いでたち去った。

滝に行く目的は、連合いが大病し小康状態となっているが滝壺から出るマイナスイオンを浴び、体調を良くし生き生きと過すことを望んでいるからだ。その彼の心の姿勢は、寛容で平等に穏やかに人に接する等、素直に尊敬でき老いながらも、寄り添いたいと思っている。希望を叶えてあげたいと滝への見当がないまま車を走らせた。丁度、縁側で寛ぐ小母さん達に会い宮の瀧を尋ねた。「この先の鬱蒼とした森に苔むす鳥居があって…古い神社の裏で…よう行ってか」と心配顔された。木々の重なりで見逃していた参道入口に立った時、少年達が高校の場所を知っていても、滝の存在を知るはずもないと納得した。滝へ進むほど道中に恐怖を感じ、連合いに引き返すことを強く求め従ってもらった。

帰り道、小母さん宅に寄り瀧行きを残念した、と話すと「そりゃ良かった、貴方達が何が何でも瀧に行きたそうなので、よう言わんかったけど熊は出るし地元の人達も余り行かないでなぁ…帰ってこられてホッとした。よかった」通りすがりの私達の安否を気遣い安堵された様子から、大層心配して下さっていた事がわかった。小母さん達の飾らない言葉が身にしみ温かい繋がりの手を差しのべて戴いた。このバトンを次の人達に渡すには、明日の自分に生かさなければ、と思ったが小母さん達のような真心を伝えられるか不安である。

帰りの車中で連合いと「昼下がりに聞いた『おばさぁ～ん、何のお役にもたちませずご免なさぁ～い』は、遠慮がちに話したあの少年よね。自転車でたち去ってからも滝への道案内ができなかった事が気掛かりで、私に届けと懸命に叫んでくれたのに違いないね」と話し合った。

そうだ、あの場で目立った存在でなかったあの少年が、自分の気持を自分の声で健気に、精一ぱいの力で伝えてくれた勇気が頼もしく胸を打たれた。「清々しい気分を貰ったね」

山里での出会いで戴いた、思いやりと勇気、二つの言葉は私を磨く心の豊かさへ、繋がったと喜んでいる。山々に向かって笑顔で〝ありがとう〟の言葉を響かせ、西脇に帰ってきた。